



### 私と不妊治療（その2）～カウンセラー体験談～

体外受精には大きな期待をしました。生殖医療の技術にすぎる思いで3年間に4回トライしましたが妊娠には至りませんでした。採卵のため排卵誘発剤の副作用でお腹に腹水がたまり、その都度具合悪くなりました。一度は重症化して入院を要しました。卵巣過剰刺激症候群でしたが、そのリスクについての情報はほとんどなく、薬に反応することが妊娠の期待を高めるような説明を受けました。

治療を繰り返して行く度に、この治療が自分の健康な体にどんな影響を及ぼしているのか、子どもを授からない悲しさとともに、言い知れぬ不安も襲ってきました。検査や診察で味わう精神的苦痛、身体的苦痛にも打ちのめされそうでした。



大学病院はいつも患者が多くて待ち時間も長く、毎回治療のスケジュールを立てに通院しているようで、医師とのコミュニケーションもなかなか取りづらい状況でした。

当時は、インターネットが普及する前でしたし、一般向けの不妊治療に関する雑誌等はなく、病院でも患者向けに情報提供するようなサービスはありませんでした。治療の不安や疑問、悩みを相談する相手もいなくて、情報提供もメンタルケアも皆無でした。

これほど心細く、この先どう対処すればいいのか、結婚して子どもを産み、家族をつくるという当たり前に思っていたことが実現しないかもしれない自分とどう折り合いをつけていいのか苦しみました。これまで持っていた女性としてのアイデンティティーの喪失感や欠落感、周囲へ嫉妬を感じることに自己嫌悪…等々、今まで感じたことのないやりきれなさに情緒不安定に陥りました。

治療を続けることに疲れ、この治療から自然にフェードアウトして行きました。高度な医療技術も万能ではないこと、いくら望んでも叶わないこともあると身をもって知りました。空しい思いでしたが、時間の経過は徐々に自分の中で作り上げてしまった束縛を解きほぐしてくれ、現実を受け入れること、人それぞれの生き方があるということ学びました。



初対面の人によく「お子さんは？」と質問されます。「いません」と答えると、「どうして?」「つくらなかったの?」と言われることがあります。子どもはいて当たり前という社会通念は未だ根深く残っています。不妊について医学的にも解明されていないこともまだ多く、社会はそのことについてあまりに認識不足で無理解だと感じます。



不妊で悩んでいる人達が、社会からのプレッシャーで辛い思いをすることがなくなるように、治療現場のメンタルケアだけでなく、将来子どもを望むであろう若い世代や、一般の人達にも向けても、生殖について、不妊について、またそれを取り巻く社会や医療の現状についての知識や理解を深めてもらえるような情報発信もして行きたいと考えるようになりました。

#### 8月・9月のカウンセリング予定日



8月1日(土曜日)、14日(金曜日)、15日(土曜日)、  
25日(火曜日)不妊学級、28日(金曜日)、29日(土曜日)  
9月4日(金曜日)、5日(土曜日)、18日(金曜日)  
19日(土曜日)不妊学級

